



クーリングタイムに選手が利用する「クーリングスペース」=5日、甲子園

酷暑対策で導入、変調来す選手も



クーリング 各校対応工夫

第105回全国高校野球選手権大会は15日、台風接近のため甲子園球場で予定されていた3回戦4試合を中止し16日に順延した。酷暑対策として、五回終了時に体を冷やして水分を補給する10分の「クーリングタイム」を導入した今大会。14日までに1、2回戦の33試合を終え、選手や監督は対応を工夫している。

開幕した6日はクーリングタイム後に変調を来す選手が続出した。聖光学院（福島）は4人が脚をつり、小室投手は六回にふくらはぎ、太もも裏のけいれんで降板。「涼しい場所にいすぎた」と話し、斎藤監督は冷風機や保冷剤入りベストが用意されたベンチ裏通路と灼熱のグラウンドの温度差を懸念した。

光星・仲井監督「あって良かった」

14日の3試合など、気象条件次第でクーリングタイムを省くこともある。最も大切なのは熱中症の予防。その上で、いかに体が動くよう整えるか。小柳さんは「どんな感じか分かってきていると思う。いいパフォーマンスが発揮できるように使ってもらいたい」と願った。

を観察し「（冷やす）時間を抑えた」という。それでも当事者には慣れが必要だ。13日、先発で好投していた履正社（大阪）の福田投手は六回に突然乱れて2失点。直後の攻撃で三塁打を放った際に脚がつった。「体が冷え切ってしまったのかな。体を動かすなど準備していかないと」と3回戦への反省点に挙げた。

最高気温は連日35度前後。選手の健康管理を支える理学療法士グループ「アスリートケア」の小柳磨毅代表理事は「この環境の中でスポーツに（クーリングタイムは）必要なことで、体の冷却を優先しようという意識付けが大事」と語る。問題なく進んだ試合も多く、八戸学院光星の仲井監督は「あって良かった」と話した。